

## Special Essay

### 「自分の在りようを考える」

麻醉学講座  
牛島 一男

「夕鶴」などで有名な劇作家である木下順二の作品に「おんによる盛衰記」という戯曲がある。おんによる熊太郎（おんによるとは、新潟地方の方言で仁王や大王の意味）と呼ばれた力自慢の暴れん坊が、生まれた村に舞い戻り、そこで村人たちと繰り広げる騒動を愉快地描いている。村に三つの難儀があり、一つは山に住む虎狼、二つ目が湖の大蛇であった。村人たちは相談の結果、熊太郎をおだて上げ、2匹を退治してもらうことにした。孤軍奮闘、見事に大役を果たした熊太郎が三つ目は何かと問うても、村人たちは一様に黙り込んでしまう。それもそのはず、村にとって最大の難儀は乱暴者の熊太郎そのものであったという話である。

解釈は人それぞれであろう。党利党略によって異質な存在を排除しかねない現代社会と重ねながら、人間の生きる意味を痛快に表現したという見方もあれば、木下順二は、「自分の中にある自分の力で、自分が閉口してしまう」物語であると述べている。私はこの戯曲から、医療従事者とくに医師の在りようを思った。医師（自分）は患者の「難儀」に全力で立ち向かい、それを取り除くことで感謝もされ、喜びを感じる。しかし一方では、自分の言動や行為により患者が大小を問わず不幸な転帰をとることも決して稀ではない。その場合、自分の存在が患者にとって「難儀」になる。ある統計によると、わが国における医療事故による死亡は年間2～3万人である。自分の在りようには、良いことと悪いことの少なくとも二面性があることを常に意識しておきたいものである。つまりは謙遜心を忘れないことであろう。

